

感染症の蔓延国と名指しされました。近年は政府も重い腰を上げ、再度、予防接種行政を推進する方向に転換しました。

これにより、近年、乳幼児の髄膜炎予防のHibワクチンや、髄膜炎菌ワクチン、水

2. 大人の予防接種の意味と考え方

そもそも予防接種は、弱者である子供に接種し、感染症をかいぐり成人まで育むことを目的に行われることから始まりました。大人の予防接種は、自分が感染し発症するのを予防するためが主目的ですが、それに加えて、家族や社会の中の感染源となることを防ぐ目的で接種されることもあります。集団生活がまれだつた高齢者が医療施設や介護施設で、集団の中におかれる場合が増えたことも大人の予防接種が見直された一因です。さて、大人の予防接種には概ね次の2種類があります。

1) 幼少者に接種しそこなつたもの

これは、小児期に接種しなければならなかつた予防接種をし忘れて、海外にいて受け損なつたものなどです。また、自分が子供時分にはまだワクチン接種が無かつたものなども含まれます。様々な問題があつて、一時中止されていた予防接種などもありました。

接種し忘れたワクチンに関しては、概ね不足回数を補う形で行います。また、成人になつてからの接種は、乳幼児期よりも免疫力が進化しているので、初回接種回数が3回でなく2回でも有効であることがわかっています。

2) 成人に接種が必要なもの

過去には1回接種が基本でしたが、近年は2回接種となつたり、流行が減つて再感染の機会が減り、抗体価が落ちるなど、免疫力が低下し、追加接種した方がよいことが近年わかつたものが該当します。また、高齢になり体力が弱り、肺炎などの大病で

痘ワクチン、B型肝炎ワクチン、成人の肺炎球菌ワクチンや子宮頸ガンワクチン、風疹予防事業としての抗体検査や予防接種が行われるようになりました。今回はこの中で、主に大人の予防接種を中心に整理しました。

入院や死亡の頻度を減らす目的で導入されたものなどもあります。

麻疹：2015年に日本での麻疹の排除がWHO（世界保険機構）で認定されましたが、引き続き海外渡航者が持ち帰つて広まる感染と集団発生が見られます。小児の予防接種が徹底されたため、近年、感染者の70～80%が成人となっています。感染者の多くは未接種者や1回接種者であるため、現在のお子さんと同様に2回の接種が推奨されています。1回接種歴のある方も海外渡航前に2回目を接種しておきましょう。

風疹：2012～2013年に17,000人を越える大規模な国内流行が起こり、45人の先天性風疹症候群（CRS）の赤ちゃんが生まれました。風疹自体は大病でないため、生まれつき心疾患、難聴、白内障などを起こす、CRSを発生させないことが風疹の予防接種の目的です。妊娠可能な女性の感染は、配偶者など同年代の男性が感染源となる例が多いことがわかり、2022年3月31日までの間に限り、昭和37年4月2日から昭和54年4月1日までの間に生まれた男性（対象世代の男性）が風疹に係る定期の予防接種の対象者として追加されました。これに伴い、風疹の抗体検査を受け、その結果、十分な抗体価がない方、平成26年4月以降に抗体検査を受け、十分な抗体価がないということが判明している方は、国の事業として予防接種を受けることができます。また、これに該当しない31歳～60歳男性や、妊娠を希望したり予定している女性にも、県の事業として抗体検査や予防接種への助成があります。なお、母子手帳が残っている場合は必ず接種歴を確認ください。

麻疹、風疹以外は次項で。

3. 中高齢者の予防接種

中高齢者は免疫力が落ち、様々な感染症にかかつたり、それが重症化します。これを予防するために以下のワクチン接種が推奨されています。

高齢者肺炎球菌ワクチン

病院内感染ではなく市中肺炎のうち高齢者に最も多いのが肺炎球菌による肺炎です。一口に肺炎球菌と言っても100種類にも登る株があり、その中でも毒性が強く重症化しやすい株を23種類集めて作つたワクチンが、ニューモバックス®と呼ばれるワクチンです。肺炎球菌ワクチンには、乳児に接種し、髄膜炎予防に使う13種の株を含んだプレベナー®もあります。現在、前者だけが65歳以上の未接種者に5歳刻みの年に公費助成が受けられます。ニューモバックス®は5年後以降再接種可能ですが、2回目以降は公費助成は受けられません。アメリカではこれに加え、プレベナー®の接種の併用が推奨されていますが、現在の日本ではまだ承認されておらず、公費助成はありません。一部の意識の高い医療機関では推奨し実施を促しているところもあるようで、今後、こちらも導入が進むかもしれません。

インフルエンザワクチン

インフルエンザが流行する前の10月～翌1月くらいまでに接種されます。毎年翌年の流行をWHOが予測し、推奨株を提示

し、それに沿つて各国が自国の実情に併せて作成します。通常A型が2株、B型が2株の4種のウイルスから作られた4価ワクチンとなっています。接種後、抗体ができるまで2週間程度はかかるため、流行が始まる前に接種してください。12歳以下は通常2回接種となっています。デイサービスなど集団生活の機会が多い高齢者は、必ずやつておきましょう。なお、このワクチンはインフルエンザの発症を完全に予防することはできず、重症化の予防が主目的なので接種したことで安心せず、流行時はマスクを着用し、インフルエンザかなと思つたら必ず受診してください。

带状疱疹ワクチン

水痘・带状疱疹ウイルスに初感染すると水ぼうそうになり、そのままウイルスが体に潜み、病気や高齢化で免疫力が落ちた時に暴れたのが带状疱疹です。小児で定期接種となっている水痘ワクチンの接種で带状疱疹の発症率が50%減少し、带状疱疹後神経痛の2/3が予防できることがわかっています。50歳以上になると带状疱疹の発症率が上がるので、対象者はこれ以上の年齢の方です。なお、小児用の水痘ワクチンと带状疱疹用のZOSTAVAX®は生ワクチンなので抗ガン剤などで免疫力が著減した方の場合、重症な水痘を起こすことがあるため、不活化ワクチン類似のShingrix®などが用いられる場合もあります。

子宮頸ガンワクチンのその後

子宮頸ガンは人パピローマウイルス（HPV）の性交感染が原因で起こるため、HPV16型と18型の2つの株を含むワクチンが、2013年4月より定期接種となつた。思春期の女性を対象者だが、定期接種開始後より、接種者の局所反応としての痛みの他に、吐き気やしびれ、全身の痛みなどの訴えがあり、社会問題化したため、同年6月にははや、接種勧奨が中止となり、6年が経過しました。海外では同じワクチンの接種が70カ国以上で国の事

業として行われており、他の予防接種と同程度の副作用しか報告されていないとのことです。このため、現在ではワクチンの子宮頸ガンの予防効果は期待できるにも関わらず、日本での接種率は対象者の1%に満たないため、婦人科学会その他から接種勧奨の声も挙がっています。なお、同様な副作用が問題になっている国もあり、公式見解は大本営発表である可能性もあり、真相は不明です。